RittorMusic
An impress Group Company

各　　位

2022 年 6 月 13 日
株式会社リットーミュージック

元 BEAMS の青野賢一による「音楽」と「ファッション」の書籍が発売。
文学や映画も巻き込んだ鮮やかな考察で、文化の見え方が変わる。

インプレスグループで音楽関連のメディア事業を手掛ける株式会社リットーミュージック（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：松本大輔）は、『音楽とファッション　6 つの現代的視点』を、2022 年 7 月 23 日に発売します。

“ポピュラー・ミュージック”には、その歴史を語るうえで欠かすことができないさまざまな文化的背景があります。これは“ファッション”という文化においても同様です。この本では、音楽とファッションが出会い、生まれたムーブメントや流行、そしてアイコニックなアーティストの姿から、現代の問題意識と通底しているトピックスをピックアップしています。

著者の青野賢一は、株式会社ビームスにて PR、クリエイティブ・ディレクター、〈BEAMS RECORDS〉のディレクターなどを務め、現在は独立し、音楽、ファッション、映画、文学、美術

といった文化芸術全般を活動のフィールドに活躍する文筆家／DJ／クリエイティブ・ディレクターです。本書は、これまでにさまざまな媒体で手掛けてきた「音楽」と「ファッション」に関する記事を集め大幅に加筆修正し、書き下ろし原稿を加えたもの。

ジェンダー、他者の文化、レイシズムといった現代的な視点で、映画や文学にも接近しながら、音楽とファッションの相互作用を鮮やかに考察。単なる“音楽とファッションの歴史本”ではない、アクチュアルな問題意識を提示する１冊です。

本書のカバーデザインは、古い雑誌や紙物を素材にハサミと糊を使ってコラージュ作品を生み出す M!DOR!が担当しています。『VOGUE JAPAN』『装苑』といった雑誌誌面や書籍の装画、また official 髭男 dism や Perfume といったミュージシャンのアートワークなど、多方面で活躍するコラージュ作家です。

『Happier Than Ever』（2021年）
大ヒットを記録した新作『WHEN WE ALL FALL ASLEEP, WHERE DO WE GO?』の高い評価から期待が膨らむなか投下された二枚目のアルバム。アートワークは肌色のトーンで統一され、前作までのダークかつ剛々しい雰囲気とのギャップが印象的

されており、なかでも「Bad Guy」は、二〇〇〇年以降に生まれたアーティストとしては初めての全米シングル・チャート一位という偉業を達成した。

翌二〇二〇年の「第六十二回グラミー賞」でビリーは年間最優秀レコード賞、年間最優秀アルバム賞、年間最優秀楽曲賞、最優秀新人賞の主要四部門を含む計五部門を受賞、グラミー賞での主要四部門受賞は実に三十九年ぶりで史上二人目、最年少、そして初の女性アーティストという晴らしい結果を残した。それぱかりか、二〇二一年の「第六十三回グラミー賞」でも二年連続となる年間最優秀レコード賞と最優秀映像作品楽曲賞を受賞し、世界に圧倒的な存在感を示したのであった。

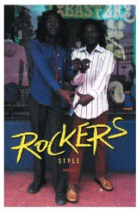
現時点での最新作であるセカンド・アルバム『Happier Than Ever』（二〇二一）も全米、全英を含む十五カ国で一位を獲得し、いまや不動の人気を誇るビリー。グラミー賞での快挙や映画「007／ノー・タイム・トゥ・ダイ」（二〇二一）の主題歌「No Time To Die」を担当したことで、より幅広い世代に楽曲が聴かれるようになったが、熱い支持者たちの多くはやはり彼女と近い世代の若者であろう。それはなぜかと考えるに、本稿の前半に記した「見られること」への意

2019年10月19日、ロサンゼルスで開催されたラジオ局主催のチャリティ・コンサート「ウィー・キャン・サバイブ」でパフォーマンスするビリー。この頃はオーバーサイズのセットアップなどを着用することが多かった

Photo by Kevin Winter/Gerry Images for RADIO.COM

だし、存在感を放っている。

ボブ・マーリーの活躍を筆頭に、レゲエは各国で若者を中心に人気となり、とりわけイギリスのハード・モッズである「スキンズ（スキンヘッズ）」たちに支持され、音楽だけでなく解放を求めて戦う姿勢などへの共感を生み、多大な影響を与えた。のちのロンドン・パンク・シーンでもレゲエは参照されるが、これなどもどちらかといえばレゲエの本質的な考え方と自分たちの状況や取るべき態度を重ねうえでのことではなかったかと思う。そうした時代を経て、ボブ・マーリーが亡くなり、またダンスホール・レゲエが登場する頃になると、パンクと同様、音楽もファッションもその様式だけが一人歩きを始めるようになるわけだが、これはポピュラー・ミュージックの宿命としてはある程度仕方のないところ。ラスタ・カラーのTシャツを着ている人皆、ラスタの考え方に傾倒しているとは考えられない現在。せめてラスタ・カラーを構成するそれぞれの色の意味くらいは記憶しておきたいものだ。



『ROCKERS STYLE』
1977年に公開されたレゲエ・ムービー『ロッカーズ』撮影時の写真を収めた1冊。ファッションのスタイルだけでなく、彼らの日常の様子も写されている

1980年6月、ロンドンのクリスタルパレスボウルのステージに立つボブ・マーリー。「Bob」と胸元に小さく刺繍されたジャケットは緑・黄・赤・黒のラスタ・カラーだ

Photo by Pete Still/Redferns

片手でコーピング（歪曲面の縁）を捉えながらデッキのフロント側を掴んだまま空中静止するというダイナミックなトリックをキメているのは、パウエル・ペラルタにより結成されたスケーター・チーム「ボーンズ・ブリゲード」の代表的なスケーターであり、スケートボードの歴史上でも伝説的な存在として語られるスティーブ・キャバレロ。1985年8月のカリフォルニアにて開催された全米スケートボード協会によるイベントの一場である

Photo by Doug Pensinger/Getty Images

りジャンルは関係なく、自由に聴かれているというのが実際ではないだろうか。ファッションも同様で、スケートするのに不都合がなければ何だって構わない。スケート・シューズではなく、〈ナイキ〉や〈アディダス〉のスニーカーで滑っているスケーターはいまや普通であろう。これは、スケートボードが「スケート・パーク」での「バーチカル」からストリートに移っていったことと無関係ではなさそうだ。というのも、「バーチカル」ではヘルメットやプロテクターを装着することが少くなかったが、街中で滑る際にはそれらは不要となり、自らが着たいものを選べばよくなったからである。そんな自由さと、スケートボードという共通言語があればつながることができることから、スケートボードから派生するコミュニティは、落ち着けるところがないひとにとってのアジ

『ラストブラックマン・イン・サンフランシスコ』（2019年）

日本では2020年に公開。監督のジョー・タルボットと主演のジミー・フェイルズの実体験を元にしてあり、ジミーは本人役を演じた。二人が短い予告動画を制作したことから始まり、資金をクラウドファンディングで募集したところ多数の支援者を獲得した

価格：¥4,180（税込／DVD）
発売・販売元：TCエンタテインメント
© 2019 A24 DISTRIBUTION LLC.ALL RIGHTS RESERVED.

＊11 スティーヴン・ケンプリンスキー　一九八二年に結成されたハードコアパンクバンド。ボーカルのジム・ミューアの実弟マイク・ミューアらが、ベーシストとして在籍していたこともあり、

ック・ケルアックをはじめとするビートニクたちの作品が影響力を持っていた一方、ロンドンのパンクスたちはそうした文学作品よりもアート作品への興味がまさっていたような印象だ。ポール・シムノンによれば、初期のザ・クラッシュはお金がなかったので古着を使って新しい服〈衣装〉を作ろうとしていたが、それにロバート・ラウシェンバーグの写真を入れたり、服の上にジャクソン・ポロック風の絵を描いたりしていたそうである。こうした違いをごく大雑把にいえば、ニューヨークは文学、ロンドンはアートなどの視覚表現に影響を受けていたところがある、ということになるだろうか。考えてみれば、ロンドンのパンク・シーンが総じてファッションに注力していたのは、視覚表現からの影響を反映させやすかったのが着るものだったということと、階級社会では外見に批判精神を込めることができたからではないだろうか。そのあたりをうまく突いたのがマルコム・マクラーレンでありヴィヴィアン・ウエストウッドだったのだ。

いまや「パンク・ファッション」はすっかり記号と化してしまったが、パンク・ムーブメント終息後も脈々と受け継がれてきた「パンクの精神性」は現代においても有効であるように思われる。ただ、今はかつてのパンク・シーンで叫ばれた「反」の対象とは比べものにならないほど、さまざまな事象が細分化されていることが「反」に統く行動を難しくしているところはあるかもしれない。まず、自分にとってどの「反」が優先順位が高いのかを見極めて、そこからアクションを起こしてみるのが得策だろうか。

＊6 ロバート・ラウシェンバーグ　一九二五年生まれ、アメリカの芸術家。一九五〇年代から一九八〇年代頃のアメリカにおけるアヴァンギャルドなコンテンポラリー・アートの重要な代表的な存在。

＊7 ジャクソン・ポロック　第二次世界大戦後にアメリカの前衛芸術家として活躍した存在。ドイツ、フランス、ベルギーなどを経て、アクション・ペインティングという画風をキャンバスに滴り落ちる絵具をキャンバスに滴り落ちる絵具をキャンバスに滴り落ちる絵具

■書誌情報

書名：音楽とファッション　6 つの現代的視点
著者：青野賢一
定価：本体 2,400 円＋税
発売：2022 年 7 月 23 日
発行：リットーミュージック
商品情報ページ　https://www.rittor-music.co.jp/product/detail/3121317108/

CONTENTS（内容は予告なく変更となる場合があります）

第一章　音楽表現とファッション性におけるジェンダー――強調、転倒からパーソナルな領域へ
ジョニ・ミッチェル――ワイト島音楽祭の黄色いドレス
パティ・スミス――留まらない詩人
多様性を受け入れるニュー・ロマンティクス――ボーイ・ジョージとカルチャー・クラブ
レディー・ガガの自覚性が世の中を照らす
隠さざるを得ない気持ちと共鳴する音楽 ――ビリー・アイリッシュ
丁寧に作り上げられたその世界を覗く――スネイル・メイル
音楽とルッキズムについての覚書

第二章　“反”と音楽とファッション――反戦／反体制／反大人
ラスタ・カラーの意味、いえますか？
受け継がれる精神性、記号と化したファッション ――ドキュメンタリー『パンク：アティテュード』
シグネチャーのある音楽と佇まい ――エルヴィス・コステロ
ポール・ウェラー――アイビー・スタイルから覗く英国人の矜持
パンクはファッションにあらず ――トレイシー・ソーン
カート・コバーン――流行はオルタナティブを放逐する
「反」を突きつけられた側の魅力を発見する

第三章　芸術表現における異文化との交流――変わりゆくボーダーライン
文化の盗用と音楽ジャンル
一九七〇年代のＹＭＯから考える、妄想する余白
一九八〇年代の日本におけるスウィング・ジャズ・リバイバルとキャンプ、キッチュ
大衆性、娯楽性と批評性 ――ＢＴＳとリナ・サワヤマから考えるポピュラー・ミュージック
文化を巡る飛行機、あるいはタイムマシン ――クルアンビン『Con Todo El Mundo』
アイデンティティとファッション、音楽の関係を鮮やかに表現するデザイナー、ニコラス・デイリー

第四章　差別との戦い——レイシズムに反発するアート・センス
B.B.キング ——アメリカはブルースを忘れない
マイルス・デイヴィスの装いと時代
ファッションアイコンでもあったブラックパンサー党
時代の音楽とファッションの集大成——ハーレム・カルチュラル・フェスティバル
ポピュラー・ミュージックに求められる社会的役割 ——ジョン・バティステ

第五章　美術とスポーツとテクノロジー——拡張されていくアート・センス
デヴィッド・ボウイ——機械の上手な操縦法
ゴシック・ロマンスの歌姫 ——ケイト・ブッシュ「Cloudbusting」
都市に介入し、風景を変える行動としてのヒップホップ ——映画『スタイル・ウォーズ』
映画から考えるスケート・カルチャー
テクノロジーを引き連れて進むビョーク

第六章　音楽、ファッションと“悪”——不良性と逸脱の魅力
イギリスのユース・カルチャーの背景——一九五〇年代から一九七〇年代まで
隠しようもない人生の悲哀 ——チェット・ベイカー
一九六〇年代のポップ・アイコンから真似のできない境地へ ——マリアンヌ・フェイスフル
破壊と創造の一九六〇年代——『ワン・プラス・ワン』のローリング・ストーンズ
キリスト教信仰のパロディとしてのブラック・メタル ——映画『ロード・オブ・カオス』

終章　音楽からファッション・ムーヴメントは生まれるか——結び

PROFILE

青野賢一（あおの・けんいち）
1968 年東京生まれ。株式会社ビームスにて PR、クリエイティブ・ディレクター、〈BEAMS RECORDS〉のディレクターなどを務め、2021 年に退社、独立する。音楽、ファッション、映画、文学、美術といった文化芸術全般を活動のフィールドに文筆家／DJ／クリエイティブ・ディレクターとして活躍している。著書に 2014 年の『迷宮行き』（天然文庫／BCCKS）がある。
◎https://twitter.com/kenichi_aono

【株式会社リットーミュージック】https://www.rittor-music.co.jp/

『ギター・マガジン』『サウンド＆レコーディング・マガジン』等の楽器演奏や音楽制作を行うプレイヤー＆クリエイター向け専門雑誌、楽器教則本等の出版に加え、電子出版、映像・音源の配信等、音楽関連のメディア＆コンテンツ事業を展開しています。新しく誕生した多目的スペース「御茶ノ水 Rittor Base」の運営のほか、国内最大級の楽器マーケットプレイス『デジマート』やエン

タメ情報サイト『耳マン』、T シャツのオンデマンド販売サイト『TOD』等の Web サービスも人気です。

【インプレスグループ】　https://www.impressholdings.com/
株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証スタンダード市場 9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】
株式会社リットーミュージック　広報担当
E-mail: pr@rittor-music.co.jp